

大谷ゆかり

（平成二十八年十一月号）

わらわらと集う男ら廃屋と柿の老木たおされてゆく

割り切ったつもり的心 切株がざらざらとした断面を見す

鳥たちの雨後の囁りさようならさようなら早起きの鶯

蝉たちの合唱隊は解散しふたつの耳のうつせみ残る

切株にあつ新しい芽の束が低く揺れおり海草のごと

負けず嫌いの新芽のみどり時折の風つかまえて我に手を振る

切株は寂しさの椅子ゆうやみが腰をかければ消えてしまいいぬ



●作者の言葉

お隣の柿の木は、なぜかわが家の方へつんのめって立っており、倒れそうで心配していました。秋は実がなるもの

の、冬は庭が枯葉で一杯になりました。しかし、人間とは勝手なもので、なくなつてしまふとこれがまた寂しい。柿の木に集う鶯や蝉の声が、心

を照らしてくれていたことに気付いたのでした。三首目の「さようならさようなら」は、今なら「ありがとうありがとう」と詠むと思います。黒岩剛仁先生、切株の歌に共感して下さり、また、選者賞を頂き、本当にありがとうございます。

●選者の言葉

昨年七月号〜本年六月号で私が特選に選ばせて頂いたのは、計四三人。その中で二度ずつ選んだのは、梅原ひろみ、大谷ゆかり、三浦尚子、中西由起子、高橋秀の五人であった。この方々の作品と、九月号の佐藤モニカ作、十二月号の片岡なおこ作、一月号の前川多美江作、三月号の山口明子作などを何度も読み比べた。

結果としては、上に掲げたように、昨年十一月号の大谷作七首を年間選者賞とした。廃屋とともに倒された老木とその後を描いているのだが、へ割り切ったつもり的心切株がざらざらとした断面を見すへ切株は寂しさの椅子ゆうやみが腰をかければ消えてしまいいぬ等、「切株」に寄せられた思いに共感した。